様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25　年　3　月　31　日現在

機関番号：32303
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2012
課題番号：22330190
研究課題名（和文）：東アジアの大学を結ぶ対話共同体への参与過程として生成される集団間異文化理解
研究課題名（英文）：Cross-cultural understanding between groups generated as a participation process to the dialog community of connecting East Asia
研究代表者
呉　宣児　（OH　SUNAH ）
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授
研究者番号：90363308

研究成果の概要（和文）：日本の大学と中国、韓国、ベトナムの大学がペアになり交流授業を行い、集団間の異文化理解が起こりやすい授業の方式や素材の検討を行った。授業の素材としては、映画、イラストーによるストーリ、公的な場所での規範・ルールなどが有用であることを確認した。また異文化理解へのプロセスを検討する分析概念として「歪んだ合わせ鏡」「対の構造」「対話の接続と遮断」「情動反応」などの用語が有効であることが示された。

研究成果の概要（英文）：The Japanese university and the university of China, South Korea, and Vietnam became a pair and each pair has performed the interchange classes. We have investigated the material and method of the class for cross-cultural understanding between groups. We confirmed that we could use movies, stories by illustration, the norm as a material of interchange class. Moreover, in order to examine the process to cross-cultural understanding, it was shown that terms, such as "a bent mirror set against each other", " opposition of structure", "connection of a dialog and interception", and an "affective reaction", are effective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2012 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総　計	7,500,000	2,250,000	9,750,000

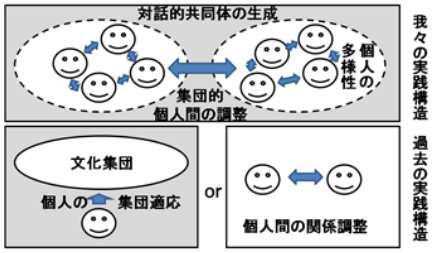
研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：教授法、文化間対話的教授学習、文化的他者、集団的対話構造、異己との共存、教育心理学的実践

１．研究開始当初の背景

一方で文化間対立が深刻化し、他方で東アジア共同体構想が語られる状況の中で、異文化理解の問題を、「個人の文化適応」や「個人間の関係調整」のレベルを超え、**「集団的な個人間の関係調整」**のレベルで考える必要性が増している。個人はそこで集団内で生きる**文化的な「共同性」を持った個人**として、文化的他者（たち）とコミュニケートしているのである。

多文化共生社会の構築に向けた異文化理解教育は、これまでの個人レベルの関係調整のみならず、**「集団間の対立」という次元**を見据えた関係調整法を具体的に視野に入れ

つつ展開される必要性がある。この課題に心理学がどう取り組めるかが本研究課題の基礎にある問題意識である。



２．研究の目的

日韓中越の大学の**通常授業を結んで各種の「集団的対話構造」を生み出し**、そこに異文化的背景を持つ受講生や授業担当者が**参加して構成する「対話共同体」を生成**することにより、**各個人の新たな共同性構築**を促し、個人的な**「異文化理解」**を集団的**「異文化＜間＞理解」の次元に引き上げる**ことを目指す、新たな**教育心理学的実践及び理論研究**を行うことが本研究全体における目的である。

日韓中越の大学の各ペアが独自に、実践授業の材料の検討、対話を中心とする授業の成り立ちと異文化理解のプロセス検討を行い、さらに全体議論のなかで総括検討を行う。

３．研究の方法

日本の研究者と韓国・中国・ベトナムの研究者がペアになり、日韓・日中・日越の交流授業を行った。授業の実施と全体議論への参加は次のとおりである。＜日本-中国＞ペア１：青山学院大学　高木光太郎（教授）・北京師範大学　姜英敏（副教授）、ペア２：東京学芸大学　榊原知美（講師）・中国政法大学　片成男（副教授）、ペア３：早稲田大学　余語琢磨（准教授）・華東師範大学　周念麗（副教授）、ペア４：授業実践には関西高等学校と中国人民大学付属中学校が参加し、そのコーディネートを行い全体議論への参加したのは中国人民大学の渡辺忠温（博士後）である。＜日本-ベトナム＞ペア５：茨城大学　伊藤哲司（教授）・ベトナムオープン大学　ゴック・アイン氏、＜日本-韓国＞ペア６：共愛学園前橋国際大学　呉宣児（教授）・韓国の大真大学　崔順子（講師）

ペア毎の大学の授業の特性や受講者の状況を考慮しながら、授業形態について検討し、交流授業の素材としては、映画、特定の場面を描写した絵、特定の場面での規範意識、4カット漫画などを取り上げ、実践可能な授業パターンや有効な授業素材の検討を行った。

ペア毎に「授業計画→授業実施→授業評価」を行い、その後「全ペアの総括検討」を行った（ペア毎の授業は３－４巡回、全ペア担当者の議論が６回）。

素材や授業形態によって、大学生たちの対話共同体の形成がどのように異なっているのか、また、個人間・集団間の新たな関係調整はどのように構造かされていくのかに焦点を当て分析は進行中である。

４．研究成果

ペアごとの検討の結果を示す。

（１）　ペア１（日本の青山学院大学と中国の北京師範大学の交流授業）

日中両国の院生の対話を通し、相手国と自文化における人間関係の距離の違いにきづき、その対応を考えるきっかけをつくることを目的とした授業実践を行った。

イラストによるストーリ（大学院生の在学生・修了生の先輩・指導教員が参加した忘年会で自分の給料や相手の給料の額を話す場面）提示をすることで議論していく授業を行った。予備実験授業を含む３回の実験授業から以下のことが明らかになった。

実験授業に参加した学生のワークシートの記載内容を検討したところ、日中の学生による集団的対話の展開過程は、自身の発言に対する相手の応答を、そこに含まれる誤解や文化的信念のズレも含めて受け止め、それを足場として自身が暗黙のうちに前提としていた認識や態度を発見するという「歪んだ合わせ鏡」の構造を持つことが確認された。ただし、この構造は単純な文化間の相互反映ではなく、二つの文化が部分的に共有できる複数の認識や態度（たとえば公の場所で相手の給料を尋ねるのは適切でない）をもちつつも、それぞれの認識や態度と他の認識や態度の関係構造が異なるため、一時的に認識・態度の一致をみても、その後、対話を展開する過程で新たなズレが生じるといった過程を反復するという性質をもつ可能性が高いことが明らかになった。すなわち部分的に一致した複数の認識・態度について「歪んだ合わせ鏡」の構造が重層的に成立し、認識・態度の部分的な一致と新たなズレの発見が繰り返されると考えられる。この一致とズレを同時に生み出す対話過程を通して、参加者は「理解はできるが、同じにはできない」文化的他者との関係構築の努力に導かれる。

実験授業ではまたこのような重層的な「歪んだ合わせ鏡」構造を成立・展開させる際に、双方の文化の参加者が集団の見解を交換するのではなく、自文化集団内でのディスカッションを踏まえつつ、各参加者が相手文化の特定の参加者と二者間対話を展開することが有効である可能性が示された。

実験授業の実施については以下のような課題が残された。今回の実験授業では同一週に日中が同じ内容の授業を行い、その成果物を交換するという形式をとったため、対話のターン構造（自身の意見に対して相手の反応

があり、それをみてさらに自身の意見を述べるという展開構造）の維持がやや困難であった。日中双方の授業可能日の制約もあるが、可能であれば自然なターン構造を実現できるようにすべきであった。また Skype などを用いた直接対話の効果や、その際の授業運営方法の検討は行えなかった。

結果の分析については、上で示した分析の妥当性をより多くの事例で検証すべきであったが、時間的制約もあり不十分なままに止まっている。今後の最終成果報告に向けて得られたデータのさらなる分析を進める。また今回の実験授業では参加者を「理解はできるが、同じにはできない」という文化的他者との関係構築に導くことはできたが、さらに進んで、そうした文化的他者との新たな共同(プロジェクト)の可能性を探索するという想定される次のステップにまで進むことはできなかった。このようなステップを実現する授業方法上の工夫も含めて今後の検討課題である。

（２）ペア２（日本の東京学芸大学と中国の政法大学の交流授業）

2011 年度には、中国政法大学の片成男副教授と共同で，手紙形式のレポートや Skype を用いた交流授業を実施し，異文化集団との対話を通した日本の学生の異文化理解のプロセスについて検討した。

前期は，「車内での携帯電話の使用」というテーマで，合計 6 回（日本 3 回，中国 3 回）にわたり交流授業を実施した。初回授業においては，日本（東京）では車内での通話は禁止されているが，中国（北京）では容認されているという現状について説明した後，通話を控える利点や不便な点などについて学生に考えさせた。具体的には，学生個別の意見の記述，グループ討論，グループごとの中国への質問・意見の記述を行った。学生の記述は，翻訳のうえで中国の学生に配布された。これに対する回答が日本に返送されるという形で対話が進められた。日本の学生の記述から，中国との対話を通して，自文化を基点として相手文化を理解しようとする視点から，行為の背景にある文化的信念の相対性を尊重して相手と対話をする視点へと変化したことが示された。また，学生の異文化理解の変化には，異文化の価値や信念に対する情動反応が影響することが示唆されたことから，今後の交流授業の課題として，学生が自身の情動反応により明確に気づくことのできるテーマをとりあげていくことが見出された。

後期は，映画「トトオ」を日中共通の素材として取り上げ，授業内で鑑賞した。合計 8 回にわたり感想・質問などを交換した。

2012 年度には、学生の異文化理解をより効果的に促すための授業構成について検討した。中国政法大学の片成男副教授と共同で，次の 2 つの交流授業を行った。

前期は，前年度の交流授業のテーマであった「車内での携帯電話の使用」を再度とりあげた。2011 年度の交流授業では，車内で携帯電話を使用されると不快であるという意見が多くみられたため，今回はまず「車内での他者の通話行動に対して周囲が不快に感じる場面」をめぐる物語をグループごとに複数作成させ，国内の状況と多様性についてクラス全体で討論した。その上で，日中における現状の違い（中国では車内での通話可）について説明し，中国の学生がどのような物語を作成したか，その内容を予測させた。その後，実際に中国の学生の物語を配布し，日本の物語との相違点についてグループで討論した。また，日本の物語に対する中国の学生の感想についても配布し，考えたことや気づいた点などを話し合った。最終回における学生の記述では，2011 年度とは異なり，「日本と中国は結構，似ていると思った」など日中の共通点への言及が多くみられた。これには，問題の提示方法の違い（2011 年度は日中の違いを最初に説明，2012 年度は国内の多様性を最初に確認）が影響していることが考えられる。交流授業は合計 6 回実施された。

後期は，日中学生による共同作業の実施とその効果について検討するための最初のステップとして，日中共同で質問紙を作成し，実施した（合計 6 回）。テーマは「成人式の役割について考える」であった。

（３）ペア３（日本の早稲田大学と中国華東師範大学の交流授業）

ペア３では、生と死を考えるテーマの映画として日本の「おくり人」と中国の「涙女」、「バリ島の火葬儀礼」の実際の映像を用いて交流授業を行った。感想文交換の遠隔交流授業と日本の大学生が中国の上海に出向き直接対面した形での交流授業も行った。

集団間の対話発生以前に、集団内の個人間の差が大きく取り上げられ、中国内の異文化討論になった点、質問はたくさん並ぶが学生間の対話につながりにくい点など、集団間の対話が生成しにくくなる場面も多かった。日本の場合は話題の種類は少ないが一つの話題が出ると、それをほかの学生がとり、つなげて掘り下げていく場面が多い一方、中国の学生はそれぞれの質問や意見を並べるタイプが多く、日中の学生の間での議論が異なり平行線になりやすい点があった。また、日本の学生の場合は細かいところに注目するが、中国の学生は大きいところに注目する特徴がみられた。遠隔交流の場合は相手の顔が見えない分、感情的に対立しやすく、認知的な問題と情緒的な問題のズレが生じやすい。そ

れでも全体の検討の結果、他文化に対する集団変容として「違和感を持つ」→「差があることを意識する」→「理解しようと努力する」プロセスを経ていた。

また、議論のトランスクリプトの検討の結果、「対話の接続と遮断」という分析視点を見出した。二人以上が共感できるような意見が出たとき、その意見にみんなが傾いていくことを対話の接続とし、わかってほしいと思ったときに、向こうが理解を示してくれないと、これは「異文化だから仕方がない」と言い訳してしまうことを対話の遮断とし、集団間対話の構造の詳細な分析を進めている。

（４）ペア４（日本の関西高等学校と中国人民大学付属中学校の交流授業）

交通・通信手段の発達に伴い、異なる社会・文化・歴史的背景を持つ日本と中国の間においても様々な面での人的交流が増大している。異なる文化的背景を持つ人々が学校、職場などの場をともにし、またインターネット上でのやりとりを通じて、協働的に作業や学習を進める機会が増えていく中で、現在求められているのは外国語能力の高さ、異文化についての知識、といったものだけではなく、より対話的・実践的にそうした文化的他者との間の関係・考え方のズレを調整していくことのできる人材であると思われる。また、個人間、個人と集団間での異文化接触・適応だけではなく、内部に多様性を含んだ集団間での異文化接触・関係調整場面も増えていくものと考えられ、異文化理解教育においても、時代の状況に対応するかたちでの方法論的な模索が必要であると思われる。

そこで、集団間での対話的な異文化理解の試みとして、2011 年 10 月から 11 月にかけて、関西高等学校と中国人民大学附属中学（北京）との間で計４回にわたる対話的異文化理解実践授業を行った。第１回目の授業では、お互いの国の人間関係のあり方について議論させる材料として、日中の高校生に「先輩 A が不注意で服を裏返しに着ていた時に、後輩が何も言わずに通りすぎた」場面をイラストを用いて物語形式で提示し、その物語に対する感想を書かせた。その後、翻訳されたお互いの感想および感想に対するコメント・質問を複数回交換し、議論を行わせた。物語の中の登場人物の行動をめぐって議論が進む中で、日中の生徒間で特に「あいさつすべき相手・あいさつが必要とされる条件」および「先輩・後輩の上下関係のあり方」というふたつの点についてお互いの考え方の相違が明確化された。同時に日本の高校生においては、初期の議論に見られる「上下関係の厳しい中国社会」といった否定的なイメージから、中国における友好的な人間関係の形成のされ方への注目も生じた。

４回の議論を通じて、中国と日本の人間関係の共通点と違いについて気づきが生じるとともに、部分的には相手国と比較することを通じた自国の人間関係の特徴についての振り返りも生じていた。また、当初持っていた相手国へのイメージが変化することで、相手国の文化に対する興味の高まりが生じていた。

（５）ペア５（日本の茨城大学とベトナムのハノイオープン大学の交流授業）

短編日本映画「トトオ」とオリジナル素材である「バリの火葬儀礼」を用いて、日本とベトナムの大学それぞれで円卓シネマを行い、それらの参加者同士でメールによる意見交換を試みた。具体的には以下の通りである。

2011 年 12 月 28 日、伊藤がベトナム・ハノイに渡り、ハノイオープン大学にて「トトオ」と「バリの火葬儀礼」を用いた円卓シネマを実施。同大学のゴック・アインさんと、元茨城大学留学生でハノイ工科大学日本語講師のオアインさんの協力を得た。参加者は、同大学の学生や社会人など約 30 人。ベトナム留学中の日本人学生数名も参加してくれて、活発な議論が展開された。

2012 年 1 月 13 日、来日したハノイオープン大学のゴック・アインさんと、短期留学中で日本語が堪能な東北アジア研究所のゴ・フオン・ランさんに茨城大学まで来てもらい、そこで同じ題材で円卓シネマを実施した。参加者は、日本人学生・ベトナム人学生数名ずつに加え、中国人学生も数名参加し、そこでも活発な議論が展開された。

その後、ベトナム・日本それぞれの参加者から数人が選ばれ、ゴック・アインさんと伊藤のサポートで、英語によるメールのやりとりを開始した。最初はまずお互いに写真入りの自己紹介文を送りあった。そして日本側からまず、意見集約をはかったうえで１つのメール送り、それに対してベトナム側からも同様の返信があった。しかし、それを読んだ日本側の学生たちが的確にさらに返信を送ることができず、このメールでのやりとりの試みは、そこで途絶えてしまうことになった。

今回の問題点と課題として次のことがあげられる。

・日本側参加者は英語が苦手であった（社会人院生と中国人留学生）。自力で英語での読み書きはかなり困難。誤読も生じがちであった。

・意見を集約して文章化し、英語に翻訳して先方に送るに時間がかかりすぎた。1 ヶ月に１往復させるのがやっとである。円卓シネマを実際に行ったときから時間がかかりすぎ、モチベーションも下がってしまった。

・日本とベトナムという設定でありながら、日本側には中国人留学生が加わっている。今

回は、それをむしろプラスと考えたいが、「私たち日本人は・・・」という語りはなかなか立ち上がらなかった。

（６）ペア６（日本の共愛学園前橋国際大学と韓国の大真大学の交流授業）

日韓ペアでは、主に映画を用いた交流授業を行った（担当は共愛学園前橋国際大学の呉宣児と韓国大真大学の崔順子講師）。本研究プロジェクトが始まった 2010 年の時点ですでに、共愛学園前橋国際大学では、異文化に気づき異なる他者と向き合う手がかりを探すことを目的とする「東アジア比較文化論」の授業が数年目行われていた。映画を用いた対話創出型の授業実践の成果を踏まえ、日韓交流授業では日常の生活文化の素材ではない「あんにょん・サヨナラ」と題する日韓共同制作のドキュメンタリー映画を用いた（2010 年度 2 回、2011 年度２回交流授業）。本ドキュメンタリー映画は、具体的な個人の実話と関連した形で、靖国問題や日韓の歴史問題が取り上げられている。

日韓の大学それぞれにおいて映画を見て、「映画をみながら自分が傷ついていると感じる場面があるか、どんな場面か」「映画をみる時当事者のような感覚なのか傍観者のような感覚なのか」も含めて、各自 A6 用紙一枚程度の短い感想を書き、授業集団内で共有しながらグループ内の討論を行ったあと、各自の意見を翻訳して相手国の学生と交換して読んだ。さらに同一映画に関する他の人の感想が書かれた参考文献を読み 1000 字程度のレポートを提出させた。その次の週、提出されたレポートを紹介しつつ、教員の講義を行う形で授業を行い最終感想を提出させた。

同一授業の他の映画を用いる場合とは違い、本ドキュメンタリー映画を素材にしたときには、より感情反応が激しくおこり、日韓の学生は戦争（アジア太平洋戦争）の当事者ではないが、互いに当事者性を背負う感覚を体験し、その中で相手国と対立している自分（達）を意識し論理を展開していく場合が多い。

同じ映画を見て、両国の学生は①自分（たち）の悲しさまたは怒りの気持ちの表現があること（内容やストーリ全体だけではなく、一部場面の映像や言葉一つ一つに敏感に反応していく）、②自分または自国の反省の必要性を取り上げること（自国より相手国からの言葉に逆に救われる感情を体験し自国の反省も必要という反応）、そして③相手国に対して切に訴えること（それでも認めてほしい・理解してほしいという部分）は、両方の国のレポートから読み取れる。しかし、その具体的な場面や内容は異なり、それぞれ国の立場から言い訳したい、主張したい内容が異なることが分かり、互いの認識のギャップを意識するようになった。

この映画を用いた対話型授業では、最初から強烈な情動体験や論理の葛藤をせざるを得ない「対の構造」に投げ込まれる。映画や相手国の学生の感想文から互いに傷つきまた互いに了解・納得し、ギャップをうめようとする動きが見られた。

映画「あんにょん・サヨナラ」は、相手（達）と自分（達）がはっきり異なる他者として浮かび上がらせ認識させる「対の構造」がはっきりしている素材である。対の構造がはっきりしないタイプの素材として映画「トトオ」や「バリ島の火葬儀礼」の映像を用いてまずレポート交換による交流授業を行い（2011 年度夏）、その後日本人学生が韓国に行き直接対面した交流授業の中で議論をし、その後それぞれ短い感想文を書き交換して読む形で授業を進めた（2011 年度秋）。短編映画「トトオ」は「アンニョン・さよなら」に比べると比較的「対の構造」の現れが弱く異質感だけでなく同質感も多く、最初は集団間の差が語られるのは少ないが、対話のなかで徐々に差を見つけ出す傾向があった。「バリ島の火葬儀礼」に関しては、映像に関する基礎知識が日韓両方の大学に欠如しており、差を感じる以前に「わからない」という反応が多く、映画の詳細に関する議論よりは、自分たちの国におけるお葬式の形を語ることが中心になっていた。授業に用いる素材により他（国）者の現れ方、見え方や他（国）者と関わり方がどのように異なっているのかに関して現在分析を進めている。

（７）総括

上に６ペアの交流授業の検討結果について述べてきたが、授業実践の方法や成果そして課題に関して総括すると以下の通りである。

① まず、2 国間の交流をするにあたって、言語問題をある程度クリアすることが必要である。感想文・レポート・質問紙などの翻訳による交流、英語の E メールによる交流、直接対面した状態で通訳や英語使用による交流の方法を検討した結果、翻訳レポート交流や対面通訳の方法もある程度有用性があることが確認できた。

② 交流授業に用いた素材は、短編・長編映画、社会の規範と関わる内容のイラストによるストーリ、社会の規範と関わる説明文、社会の規範と書かわる短い物語作成、4 コマ漫画などである。これらの多様な種類の素材の活用可能性を確認したが、さらに異なる素材による活用の違いの詳細と制約について検討中である。

③ 議論のための素材のタイプとして「文化

対立型」と「文化中立型」があり、その違いによって文化＜間＞対話における異文化理解のプロセスの現れは異なる傾向があり、現在さらに分析を進めている。

④ 集団間対話構造の生成のプロセスを分析していく概念としていくつかのキーワードが浮かび上がってきた。その有効性を検討している概念・用語は、「歪んだ合わせ鏡」「対の構造」「理解はできるが同じにはできない」「対話の接続と遮断」「情動反応」などである。

異文化理解の問題を「個人間の文化適応」や「個人の関係調整」のレベルまで持っていくための教育心理学的実践・方法論の開発や理論の構築を目的として研究に取り組んできた。日韓中越の４か国における６ペアの繰り返しの授業実践の検討の過程で、想定しなかった多くの検討課題が浮かび上がり、多様なタイプの授業実践を繰り返し検討してきた。「対話型・非対話型」「対面型・非対面型」授業の実施と検討、また授業に用いる素材のタイプとして「文脈あり」「文脈なし」「文化対立型（差異前提型）・文化中立型（差異創出型）」を組み合わせた形で集団間対話を試みる授業を実施し検討してきた。これらの授業実施における対話の発生と変化のプロセスの分析を行い、さまざまな授業のフォーマットを提案するための準備が現在進行中である。その上、異文化理解をめぐる「集団的な個人間の関係調整」という視点で理論を整備し、論文・書籍として公表することが今後の課題として残っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①榊原知美・片成男・高木光太郎、　集団間対話を通した異文化理解のプロセス－日本・中国の大学間における交流授業の試み、国際教育評論、査読なし、Vol.9、2012、1-17.

〔学会発表〕（計２件）

①呉宣児・高木光太郎・榊原知美・余語琢磨・伊藤哲司、＜シンポジウム＞対話共同体への参加を通した集団間異文化理解の生成（１）－日本、中国、韓国、ベトナムの大学を結ぶ対話型授業実践を通して、日本発達心理学会第 23 回大会 2012 年 3 月 10 日名古屋国際会議場

②石下景教・水口一久・渡辺忠温、対話型授業実践による日中集団間異文化理解の試み、中国語教育学会 10 周年・高等学校中国語教育研究会 30 周年記念合同大会、2012 年 6 月 3 日、神田外国語大学

６．研究組織

(1)研究代表者

呉　宣児　（OH SUNAH）
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授
研究者番号：90363308

(2)研究分担者

高木　光太郎（TAKAGI KOTARO ）
青山学院大学・社会情報学部・教授
研究者番号：30272488

榊原　知美（SAKAKIBARA TOMOMI）
東京学芸大学・国際教育センター・講師
研究者番号：20435275
（平成 23 年度から）

余語　琢磨　（YOGO TAKUMA）
早稲田大学・人間科学学術院・准教授
研究者番号：00288052

伊藤　哲司　（ITO TETUSUJI）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：70250975

奥田　雄一郎　（OKUDA YUICHIRO）
共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准教授
研究者番号：30458442
（平成 22 年度～23 年度）

竹尾　和子　（TAKEO KAZUKO）
東京理科大学・理学部・講師
研究者番号：30366421
（平成 22 年度～23 年度）

砂川　裕一　（SUNAKAWA YUICHI）
群馬大学・社会情報学部・教授
研究者番号：90196907
(平成 22 年度のみ)

海外研究協力者

崔　順子　大真大学　講師（韓国）
片　成男　中国政法大学　副教授（中国）
姜　英敏　北京師範大学　福教授（中国）
周　念麗　華東師範大学　副教授（中国）
渡辺忠温　中国人民大学　博士後（中国）
ゴック・アイン　ベトナムオープン大学
(ベトナム)